

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 松枝佳奈

本博士論文「経世済民の志——二葉亭四迷・内田魯庵・大庭柯公のロシア研究」は、明治大正期に活躍した三人の文学者——二葉亭四迷(1862/64-1909)、内田魯庵(1868-1929)、大庭柯公(1872-1922頃)が、文学活動を超え、広範なロシア事情の研究にいかに関わったかを、当時のロシアをめぐる重大な時局と日本国内の政治社会状況に沿って考察する(原稿用紙換算で千枚を超える)浩瀚な研究である。本論文では、明治から大正期にロシア文学の翻訳・紹介に深く関わった上記三人が、単なる「文学者」や「ジャーナリスト」ではなく、ロシア文化を総体的に捉えようとした「ロシア研究者」としての大きな足跡を、実は残していたことを見事に論証した。しかも彼らは日露戦争、大逆事件、ロシア革命という激動の時代にあつて、単なる文献渉猟によるロシア事情に関する知見の獲得を目指したのではなく、近代日本の人民の自由や幸福、知的な発展と成熟を希求し、その領土の利益保持と平和的な拡大を目指す、知識人としての「経世済民の志」を抱いていたのである。

ロシアに単身乗り込み、ジャーナリストおよび文学者としての第一級の日露交渉を望みながら、病により客死した二葉亭四迷。若い頃からロシア事情や紀行の優れた書き手であり、ロシア革命後、ジャーナリストおよび社会主義思想家としてロシアに渡ったものの、スパイ嫌疑で殺害されたと推定される大庭柯公——松枝氏は、二葉亭から大庭への「ロシア研究者」の系譜があることを雄大な構想の中で描きながら、その二者を思想的にも文学的にも理解し、さらに独自のロシア研究を同時代に遂行していた人物として、森鷗外と内田魯庵を設定し、精緻に論じている。本博士論文の何よりのオリジナリティーは、従来あくまでも「文学」の領域で語られてきた二葉亭や魯庵、鷗外、大庭などの知識人たちが、政治、文化、芸術、民族、思想、生活などまでをも含む総体的な「ロシア研究」をいかに目指していたか、というこれまで見たことのない風景を一挙に現出させたところにある。

本論文は、全三部、七章(および序章、終章)から構成されており、大部な参考文献表と新出資料が付帯されている。まず序章では江戸・明治期の対露認識とロシア研究の経緯が、主に政治史の時間軸に沿って正確に整理された上で、本論の目的と構成が語られる。

第I部「二葉亭四迷のロシア研究——総体的な文学観と志士の行為の両立としての言論活動」(第一章～三章)は、二葉亭のロシア研究とそれをめぐる活動を、彼の総体的な文学観と志士の行為の両立という視点から考察する。実は元来二葉亭は、ロシアに対する脅威の念を持ち、国内外の政治や軍事、外交上で活動する志を持っていた。第一章では先行研究を網羅的にまとめつつ、一方で漢文学の素養をもち、一方で東京外国語学校でのロシア語教育を経た彼が、その双方に共通する文学観、つまり国や人民の現状と将来を憂い、政治や社会の情勢と動向を批判するという文学のあり方を理想としていったことを明らかにする。続く第二章では、ジャーナリズムにおける活動への二葉亭の関心が、すでに明治三十年代に兆していたことを提示する。とりわけ『大阪朝日新聞』におけるジャーナリストとしての言論活動について取り上げ、二葉亭のロシア情報収集の網羅性や正確性、翻訳上の工夫を検討している。第三章では、日露戦争後に一層精力的となった二葉亭によるロシア事情の紹介、解説と批評を取り上げる。ロシア文学に関する談話記事「露西亜文学談」や、日露戦争後の手帳、談話記事「文壇を警醒す」、ロシア特派前の「送別会席上の答辞」を中心に分析し、二葉亭が自身の理想と現実の間で苦悩しつつも、日本の文壇や政治、社会に対する批評精神、日露関係に対する貢献への意欲を強めていく過程を精緻に分析している。このように第I部を通じて松枝氏は、二葉亭にとって日露関係をいかにするかという長年の課題を、文学的営為とはおよそかけ離れた精緻なロシア事情分析を彼が蓄積しつつ、一方で日露戦争後の日本における「平民」や「輿論」の問題に関わる独自の研究と結節させた上で、最後のロシア特派(1908年)では、第一級の文学者としての日露交渉に可能性を見いだすまでの過程を克明に描いている。第I部は、従来の二葉亭四迷研究に新たな一角を切り拓くものとして、審査会でも高く評価された。

第Ⅱ部「内田魯庵・森鷗外のロシア研究——啓蒙と思想・言論弾圧への抵抗」(第四、五章)では、第四章冒頭で、友人魯庵と鷗外が綴った二葉亭追悼文を、詳細に分析することから始め、二人がロシア研究者としての二葉亭を同時代に理解していたという事実をまず明らかにしている。とりわけ内田魯庵が二葉亭の死後、その賞揚事業に尽力すると共に、二葉亭が本質的には運動家や実行家ではなく、ロシアの革命家や思想家に近い「自由なる思索家」であると見抜いていた、と言う。英語に長けていた魯庵自身は、英語文献を渉猟することを通じて、次第に「イギリスの」ロシア研究に注目するようになる。生前の二葉亭が実は私淑したのがイギリスの『タイムズ』紙記者で、著名なロシア研究者であったマッケンジー・ウォレスであったことを知り、それを忘れずに追悼文に書き残したのは、おそらく魯庵ただ一人である。また魯庵は、ベアリング『露国民』の翻訳出版(大日本文明協会訳 1913年)を推薦することで、日本社会に向けて正確なロシア事情の伝達するための一助となろうとした(第四章)。このように、魯庵と鷗外が「自由思想家」として二葉亭を評価し得たのは、大逆事件下の彼ら自身が、日本において深刻化していた思想・言論弾圧に抗していたからであるという鋭利な論が展開される。松枝氏はその考察のために鷗外「椋鳥通信」(1909-1913年)と魯庵「労農政府の承認問題」(1923年)が、同時代ロシア研究としても重要であると指摘した。そして前者に関しては今後の課題としたが、後者に関しては本論第五章で精緻に分析し、魯庵が、二葉亭より先鋭化された、同時代日本の政治や社会に対する批評者であった事実を浮かび上がらせた。

第Ⅲ部「大庭柯公のロシア研究——志士・二葉亭四迷の後継としての観察と実行」(第六、七章)は、松枝氏が長年研究を続けてきた大庭柯公について、その成果が十二分に発揮されている。第六章では主に明治期の大庭に焦点を当て、彼がいかに関二葉亭の志や理想を引き継ぎながらも、二葉亭以上に、可能な限り実現に奔走した実行者としての役割を担っていたかを提示する。大庭は日露戦争中、軍のロシア語通訳として活動し、捕虜のロシア人将校や革命家との直接の交流を通じて、初めて社会主義思想に触れた。深く共感した大庭は、自らロシア人の革命運動を積極的に支援したが、その活動中にウラジオストクでロシア当局に拘束され、十九日間拘禁された。松枝氏は本研究の途上で、この獄中の大庭が所蔵していたロシア語聖書を手に入れ、その頃の彼の思想の一端を今回初めて分析した。その後革命運動の支援に失敗した彼は、1906年に『大阪毎日新聞』に入社し、ジャーナリストとしての稀有な才能を示すことになる。

第七章ではその大庭の大正期の活動に焦点を当てる。1914年第一次大戦期に、日本人記者として初めてロシア軍に従軍し、英米仏露を代表する新聞記者や従軍作家たちと共に東部戦線取材する大庭に関して、松枝氏はここでも比較文学的手法を駆使し、それら同時代従軍作家たちの作品を大庭のテキストと共に読解する、という独自の分析をしている。そうした大庭のロシア研究者としての真の立ち位置をすでに理解し評価していたのは、あの内田魯庵であったという。本論第七章後半では、大庭柯公のロシア研究の白眉とも言うべき『露西亜に遊びて』を詳細に論じ、また1917年ロシア革命後は、雑誌『露西亜評論』において大庭が日本におけるロシア研究の中心的役割を果たした事実を、丁寧に掘り下げた。そして以上三部にわたる考察を経て、終章では、きわめて説得力のある筆によって、二葉亭四迷、内田魯庵、森鷗外、大庭柯公という存在のそれぞれの様態が、「文学者」「地域研究者」「志士」という独自の概念的相関図のどこに位置づけられるのかを精妙に結論づけるのである。

審査会では先ず一致して、日・英・露語の膨大な資料やテキストを正確に分析し、二葉亭から大庭に至る、説得力のある「系譜」を力強い日本語で描いた点が、高く評価された。イギリスのロシア研究を補助線に用いた慧眼も含め、今後日露交渉史、日露比較文学で必ず参照されるべき研究となろう。一方で、二葉亭のロシア文学観をこの段階で再検証する必要性や、明治期政治小説との関連性の検証など、今回俎上に挙げられたテキストを今一度大きなコンテキストから解析すべきとの意見が出された。しかしこれらの指摘は、あくまでも今後の研究の進展と論文公表の際のさらなる希望として語られたものであり、本論文の価値を損なうものではないことも確認された。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。